

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520047

研究課題名（和文） 隋唐時代における道観の基礎的研究

研究課題名（英文）A Fundamental Study of Dao-guan 道観 in the Sui and Tang Period

研究代表者

都築 晶子 (TSUZUKI AKIKO)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：00115601

研究成果の概要（和文）：中国の隋唐時代の道観（道教寺院）について、主に石刻史料を中心に正史、宋元地方志、道像などからデータを集積し、この時代の道観の全体的な俯瞰図を作成した。具体的には道観の記事を、場所 造営などの年代 在住道士、その規模など 関係する道士・地方官・士大夫など 造営者（寄進者） 附属施設 出典の項目を立てて整理し、現在の省ごとにまとめ、冊子として刊行した。また、南朝、五代の道館・道観についても付した。

研究成果の概要（英文）：About Taoist temples 道観 in the Sui and Tang period, I accumulated data from the historical materials of the stone monuments, the official history books, local history books of the Song and Yuan period, Taoist manuscripts and made the overall distribution chart on Taoist temples of this period based on it. Concretely I arranged and divided these data of Taoist temples into some following items; place, the building generation, the Taoist priests who live in there, the other Taoist priests, local government officials, and intellectuals concerned of that Taoist temple, the builder or the benefactress, the attached institution, the sources. Then I gathered it up every current ministry 省, and published as a booklet. In addition, some information of Taoist temples of the Southern Dynasties and the Five Dynasties are added.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：東洋史、隋唐時代、道教、道観

1. 研究開始当初の背景

隋唐時代の道教研究では、従来、思想・教

義が主な対象となってきた。その重要性はい

うまでもないが、当時の歴史・社会の内部に道教をどのように位置づけるかという問題は必ずしも十分に論じられてこなかった。

この問題を解明する糸口として、かねてより道観（道教の寺院）に着目してきた。道観はいわば道教の具体的な拠点であり、史料的な偏差は免れないとしても、全体的な分布をみることによって、当時の道教の勢力、組織、広がり、さらには国家や社会との関係を一定限明らかにすることができるのではないだろうか。

道観（南朝では道館と表記される）は、劉宋の時期に姿を現す。南朝では個々の修行者によって造営されることもあるが、ときとして皇帝の庇護を受けて、相当の規模の道館が建立されることもあった。隋唐時代に入ると、国家政策として道教が仏教とともに庇護されるようになり、とくに唐王朝では祖先を老子とみなしたため、全国各地に道観が建立されるようになった。しかし、長安、敦煌・トルファン地方などきわめて限られた地域における道観についてはある程度明らかになっているが、全国的な道観を俯瞰するような研究は未見であり、とりあえず、基礎的な研究として、道観のデータの集積を試みることにした。とはいえ、道観は正史などには殆ど記録されず、浩瀚な石刻史料、道蔵、宋元地方志、文集などから記事を抽出してデータとして整理する必要がある、科学研究費補助金によって研究の組織化をはかることを試みた。

2．研究の目的

本研究の目的は、中国の隋唐時代に建立された道観（道教寺院）について、文献史料から道観に関する記事を抽出してデータとして集積し、この時代の道観の全体的な俯瞰図を作成することにある。

このため、具体的には同時代史料ともいべき石刻史料を中心に、正史、地理書、宋元地方志、道蔵などから道観の記事を抽出し、

所在地、造営された年代、居住している道士、その規模、関係する道士、官僚、知識人、民衆など、造営者・寄進者など、附属施設、出典といった項目を立て、地域ごとにまとめて、この時代の道観の全国的な分布を明らかにすることによって、道教の広がりを探るとともに、国家や社会との関係、道教の制度・経済、仏教との関係などを理解するための基礎的なデータとしたい。

3．研究の方法

(1) 下記のような史料から順次に道観の史料を抽出する。

同時代史料ともいべき石刻史料

道蔵の紀伝類、および大蔵経史伝部

正史および『唐会要』『冊府元龜』などの史書

地理書

宋元時代の地方志、道観志

(2) 道蔵にみられる道観は、の史書と照合して、データとして確定する。

(3) 道観の記事について、所在地、造営された年代、居住している道士、その規模、関係する道士、官僚、知識人、民衆など、造営者・寄進者など、附属施設、出典の項目を立てて整理する。

(4) 以上のデータをまとめて、冊子として刊行する。

4．研究成果

(1) 隋唐時代の道観のデータについて、下記のように編集し、冊子（A4版、全120頁）と

して刊行した。なお、唐末の道観の推移と深く関わるために、五代十国の道観についてもデータに含めた。また、拙稿「六朝後半期の道観の成立 - 山中修道 - 」(『小田義久博士還暦記念 東洋史論集』龍谷大学東洋史研究会、1995年)で作成した南朝の道館表に多少加筆して附録として附した。基本は隋唐時代の道観の俯瞰図ではあるが、南朝から五代までを通観できるように意図したものである。

史料収集の対象

・石刻史料：陳垣編『道家金石略』(文物出版社、1988年)を参照したが、原載の諸本を確認した。また、そこには収録されなかった道観の名称、所在地、年代のみが掲載されている石刻史料の目録題跋類からも関連記事を収集した

・史書：『隋書』、『旧唐書』、『新唐書』、『旧五代史』、『新五代史』、『唐会要』、『冊府元龜』、『唐大詔令集』、『資治通鑑』
・地理：『元和郡県図志』、また『太平寰宇記』、『嘉慶重修一統志』、『読史方輿紀要』などを参照した

・地方志：『宋元方志叢刊』に収録された宋元時代の地方志

・道教：道蔵の洞真・洞玄・洞神各部の譜録類、記伝類。また、道蔵未収のものについては、『中国道観志叢刊』を参照した

・仏教：大蔵経史伝部

・文集：『全唐文』

構成

道観のデータについては、まず()全国規模の道観(例：唐・玄宗のとき全国の州郡に建立された開元観)、()長安・洛陽の道観、()現在の各省の道観(道教の名山に建立された道観を冒頭に掲げた)ごとにまとめ、さらに道観ごとに所在地、建立された年代や記録された年代など、居住していた道士(道観内部の役職名を付す)など、道観に

関わった人々(道士、官僚、知識人、民衆)、道観の造営者・寄進者、附属施設(建築物、道像、長生林、荘園、奴婢など)、出典の項目を立てて整理・編集した。

凡例

・複数の史料がある場合には、史料ごとに～の各項目の内容が変化するため、史料ごとに各項目を立てて、道観の変遷が分かるようにした。

・道蔵の記事については、所在地、年代など、関連記事を別に捜す必要がある場合も少なくないが、できるだけ解明することとした。

・道観の所在地については、当時の地名と現在地を併記した。現在地は『読史方輿紀要』の索引である青山定雄編『歴代地名要覧』に記す民国20年(1931)当時の地名による。昨今の中国では行政区画の変遷が著しく、煩瑣さを避けるためである。

なお、収録した道観数はほぼ500に及ぶ。

(2)本研究の意義

本研究は、後述するようになお多くの問題を残すことになったが、隋唐時代の道観を全体的に俯瞰するという当初の目的はひとまず達成できたものとする。

中国史研究の基礎となる正史は道教ひいては道観にほとんど言及しておらず、道観の記事はむしろ石刻史料、道・仏書、地方志に散見している。したがって、道観を全体的に俯瞰するためには、こうした史料を総合的に把握していく必要がある。本研究は、こうした総合化の最初の試みであるといつてよい。そもそも、道教の具体的な拠点である道観についてのまとまった研究はまだ充分にはなされておらず、その意味では、今後の道観研究に基礎的なデータを提供することになると思われる。さらには、隋唐時代の道教について、国家や社会との関係、その勢力と広が

り、仏教との比較、また地域社会の宗教環境などを理解していくための、言い換えれば、歴史・社会の内部に道教を位置づけるための、重要な手がかりとなるであろう。

なお、南朝時代、五代十国の道館・道観についても附したことで、道観（道館）そのものが成立した南朝から、黄巢の乱で壊滅的な打撃を受けた唐末までの過程を通観することができよう。

(3)本研究の今後の課題

最初に、本研究の道観のデータとしての問題点を述べておきたい。

本研究は、隋唐時代における道観の基礎的なデータを抽出するために、膨大な史料を対象としており、なお見落としがあることが予想される。この点については、今後の課題として補っていく予定である。

数量の上では圧倒的に多い道蔵の道観史料については、はたしてその道観が実在していたのか、教義による架空のものか区別できない場合もあり、できるだけ地理書、地方志などの史料と照合して確定したが、なお不明のものについては収録することとした。この点についても、今後、何らかの是正が必要である。

当初から予想されたことではあるが、隋唐時代では、記録から取り残された地域も少なくない。宋元時代に編纂された地方志も大都会が中心である。このため、道観の全体的な俯瞰図には、史料の濃淡によって地域的な偏差が生ずることは免れないであろう。この問題を少しでも修正する方法として、明清時代の地方志との照合も試み、とりあえず『江南地方志二十五種道教関係記事集成』（基礎研究(B)(2)15320009 江南道教の研究、研究代表者・麥谷邦夫、2007年）を参照したが、この時代の地方志でも唐代以前の記録につい

ては不明な部分が多く、また数量も膨大なものとなるため、今回は断念することとした。最近、中国において地方志の道教関係記事集成を刊行する予定も伝えられているため、それらも含めて改めて検討することとしたい。

次に、本研究の目的はあくまでも基礎的なデータの集積にあり、その分析は今後の課題ではあるが、とりあえず本研究の過程で気づいた点を幾つか挙げておきたい。

すでに指摘されていることではあるが、道観は地域にもよるが、まず安史の乱で、ついで唐末の黄巢の乱で壊滅的な打撃を受けた。個々の道観の変遷にも、この戦乱が大きな影を落としている。これらの戦乱では道観は兵士の駐屯地となった例もみられ、戦火に巻き込まれた理由もそこにある。その一方、峻険な山中に位置する道観は、近隣の人々の戦火からの避難地ともなった例もみられる。このように、道観（おそらくは仏寺も）は、戦乱という局面あるいは兵士となった社会層においては、宗教的な聖域として特別な意味をもたなかったようである。しかし、同時に地域社会の避難所という機能も担っていたようである。中国社会における宗教のあり方の一面を窺わせるものである。

道観の荒廃は、戦乱だけでなく、「無住」が原因となった例も少なくなかったようである。その要因は、仏教が民間で支持され、地域の信仰を失ったことによると思われる。

また、とも関連しようが、道観に属する荘園・長生林などの土地は、地域の農民から不断に侵奪されていた形跡がある。また、道観の荘園は、おそらく仏寺ほどの規模はなく、経済的な基盤は脆弱だったのではないだろうか。

道観の内部に建立された建築物の規格は、ほぼ『三洞奉道科戒営始』のものと同じくして

いる。このことは今後、より詳細に検討されなければならないが、梁代とも隋末ともされる『三洞奉道科戒営始』の唐代における位置づけとも関わるであろう。

5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計1件)

都築晶子、明石書店、竹村和子・義江明子編『ジェンダー史叢書第3巻 思想と文化』(第1章 中国中世の道教と女性) 2010年、pp.110-130

6．研究組織

(1)研究代表者

都築 晶子 (TSUZUKI AKIKO)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：00115601

(2)研究分担者

(3)連携研究者